

岸政彦著『断片的なもの』の社会学。この無類の、特殊な面白さは何だろう。静かに興奮しつつ読んだ。著者は、沖縄や被差別部落などをテーマにする社会学者。聞き取り調査をし、資料や統計を駆使して分析・研究を行うわけだが、同時に言う、「私の狭い理論や理解から外れるようなもののほうに、ほんとうに印象的な語りやエピソードがある」。そうして隣人たちの語りや出来事を掘り上げ、解釈や分析をほどこさず、「断片的なもの」にひたすら寄り添って言葉にしてゆく。しだいに浮上するのは、そもそも「断片

的なもの」の寄せ集めであり、不充的な存在としての私たち。読むうち、「社会」に少しづつ表情が与えられてゆく。世界を理解する手立ての一端を、全身全霊で提示する社会学者の内省が胸に迫って忘れがたい。

語りに耳を傾けることは、相手の人生に足を踏み入れること。渡辺京二著『気になる人』は、熊本に住んで広く世界を見通そうとする著者が、人生を太く生きる九人に膝詰めで話を聞く。書店員、画家、農家、レストラン経営者、詩人……オリジナルな言葉が各自の人生を足固めし

て、強い。経済状況や暮らし向きなど「気になる」ことをぐいぐい訊く著者も十分「気になる人」だ。

野本三吉著『希望をつくる島・沖縄』も、広く読まれてほしい一冊。著者は沖縄大学名誉教授。沖縄の歴史と現在を、若者に向けて語りかける。琉球王国としての歴史、日本の独立との関係、一九五九年の米軍ジェット機墜落炎上事故の災禍。以来、こんにちまで続く米軍による数々の飛行機事故。強制的に行われた土地収用……負の歴史から目をそらさず、事実を語り継ぐことで人間の自由と人権の意味を訴える、価値ある著作だ。

今月買った本

連載
161

平松洋子 (エッセイスト) 断片的なものに寄り添う



津野海太郎著『百歳までの読書術』がめつぼう面白い。七十歳を超えていよいよ「最終段階」、どう本と付き合うのか。老いを射程に入れ、さまざまな変化（歩行しながら読書をしていた習慣も、いまは机に向かつて読むことに）を甘受しながら

- ①『断片的なもの』社会学
岸政彦 朝日出版社 1560円+税
- ②『気になる人』
渡辺京二 晶文社 1500円+税
- ③『希望をつくる島・沖縄』
野本三吉 新宿書房 1800円+税
- ④『百歳までの読書術』
津野海太郎 本の雑誌社 1700円+税
- ⑤『向田邦子 おしゃれの流儀』
向田和子、かごしま近代文学館編 新潮社 1600円+税
- ⑥『イングランド炭鉱町の画家たち』
ウィリアム・フィーヴァー 乾由紀子訳 みすず書房 5800円+税
- ⑦『わたしの土地から大地へ』
セバスチャン・サルガド 中野勉訳 河出書房新社 2400円+税
- ⑧『仰向けの言葉』
堀江敏幸 平凡社 2500円+税
- ⑨『生きるための料理』
たなかれいこ リトルモア 1500円+税
- ⑩『TOMagazine』
TOpress 1800円+税

ら読書する姿には、さあ落とし前をどうつけてやろうか、あくまでも本に対する勢いには手加減がない。「百歳までの」と謳い、搦め手で世間を挑発する津野さんである。「向田邦子 おしゃれの流儀」にもたじろぐ。昭和四年生まれ、五十一年の生涯でこれだけの質と量の服を着た気概！ 着道楽の匂いは、ここにはない。向田邦子は、着ることに果敢に挑んで生きたことがひしひしと感じられ、肅然とした。

芸術をめぐる本を三冊。「イングランド炭鉱町の画家たち」は、労働者むけの美術講座から誕生した画家集団「アシントン・グループ」の記録である。一九一〇年代には世界最大の鉱山村と呼ばれた村で、わずかな光を頼りに働いた炭鉱夫たちは、描くことで自身を照らし出した。豊富な図版が、ツルハシと鉛筆の関係を考えさせる。セバスチャン・サルガド『わたしの土地から大地へ』は、世界的に知られる写真家の半自

叙伝。貧困や飢餓、内戦などを撮影してきたサルガドは、どんな半生を辿って生きてきたのか。「美しすぎる」と評される特異な写真を解説する手掛かりになるだろう。堀江敏幸著『仰向けの言葉』は、著者初の芸術評論集。駒井哲郎、ドアノ、鈴木理策、松本竣介、内藤礼、モランディ、猪熊弦一郎……著者は、それらの作品と言葉をどう響かせるのか、一編ずつに潜む目玉と意識の連動を受け取りながら、今日も繰り返し読んでいます。

買い逃していた、たなかれいこ著『生きるための料理』。「生きる」に焦点を合わせると、料理はこんなにシンプルで強いものになると教えられる。この夏、地元の書店の店頭で遭遇し、圧倒的な熱量に魅了されて手に取ったのが雑誌「TO」だ。今号の特集は世田谷。消費情報でも土地案内でもなく、町の現在にもろとも分け入る誌面に目を見張った。